

2021 年 5 月 16 日（日）「神の時、与えられる機会」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 9:11-12

11 太陽の下、私は振り返って見た。足の速い者のために競走があるのでもなく、勇士のために戦いがあるのでもない。知恵ある者のためにパンがあるのでもなく、聡明な者のために富があるのでもなく、知者のために恵みがあるのでもない。時と偶然は彼らすべてに臨む。

12 人は自分の時さえ知らない。不幸にも魚が網にかかり、鳥が罠にかかるように。突然襲いかかる災いの時に、人の子らもまた捕らえられる。

《新改訳 2017》伝道者の書 9:11-12

11 私は再び、日の下を見た。競走は足の速い人のものではなく、戦いは勇士のものではない。パンは知恵のある人のものではなく、富は悟りのある人のものではなく、愛顧は知識のある人のものではない。すべての人が時と機会に出会うからだ。

12 しかも、人は自分の時を知らない。悪い網にかかった魚のように、罠にかかった鳥のように、人の子らも、わざわいの時が突然彼らを襲うと罠にかかる。

【序論】

今日は御言葉から、私たちの人生に起きてくる「偶然」と呼ばれる事柄について考えてみたいと思います。これは一般的によく使われる言葉であり、正確には「必然性の欠如を意味し、事前には予期しえないあるいは起こらないこともありえた出来事のこと」と説明されます（Wikipedia）。

最近あった良いニュースとしては、今年の 3 月 18 日の報道で、新たな死海文書（ゼカリヤ書の一節などのギリシャ語訳）が発見されたということを耳にしました。この発見の元になっているのは、1947 年に死海の北西にあるクムラン洞窟で見つかった大量の旧約聖書の写本、外典・偽典、クムラン教団の規則や儀式書などであり、その背景には面白い逸話があります。真偽のほどはさておき、ベドウィンのターミレ族の羊飼いが子ヤギを追いかけていて、洞窟の中に石を投げ入れたところ、何かが割れる音がしたので入ってみたら、そこに古代の巻物があったということです。この「偶然」とも思える出来事が世紀の大発見となってしまいました。

さて、聖書協会共同訳では 11 節の終わりに「偶然」という言葉が出てきますが、私自身は聖書の中でこの言葉が使われることにいささか違和感を感じております。なぜなら、聖書はすべての出来事は神の聖定の下にある（永遠の定めの下で一つひとつの出来事が起きている）と教えているからです。つまり、聖書全体のメッセージとしては「偶

然」というものは存在しないことになります。原文を調べてみますと、ここで「偶然」と訳された言葉「**לְפָנַי**／ペガア」は「出来事」「事件」「機会」などの意味を持ちますので、そもそものニュアンスからやや逸脱している感がなくありません。因みに、新改訳 2017 では「機会」、フランシスコ会訳では「災難」、NIV では「**chance**」と訳されています。最新の日本語訳でどうして「偶然」が選ばれたのかということを考えさせられました。コヘレトは敢えて、物事を「偶然」と考える人々のところに身を置いて語っていると捉えることもできるのでしょうか。いずれにせよ、テキスト全体の文脈から読み解いていきたいと思います。

【本論】

本論 1. 能力と結果の乖離現象

太陽の下、私は振り返って見た。足の速い者のために競走があるのでもなく、勇士のために戦いがあるのでもない。知恵ある者のためにパンがあるのでもなく、聡明な者のために富があるのでもなく、知者のために恵みがあるのでもない。時と偶然は彼らすべてに臨む。(9:11)

「振り返って見た」(新改訳 2017:「私は再び…見た」)という表現は、本書で3回目の登場となります(4:1,7)。人間には物事を支配することができず、人生に降りかかってくる様々な出来事を受動的に受け取るほかはない無力な存在であるということが再考されている。ここでは、その事実を読者に認識させるために5つの例が挙げられています。一つずつ説明してまいります。中心にあるメッセージは「能力と結果は必ずしも一致するものではない」ということです。

①足の速い者のために競走があるのでもなく

ふつう肉体的に最も能力のある人が競争では一番になることが予想されますが、実際にはそうならないことも多いです。レース中に思わぬトラブルに巻き込まれるかもしれないし、病気などによって大会への参加そのものが阻まれるかもしれません。

②勇士のために戦いがあるのでもない

強大な軍事力そのものが勝利を保証するのではなく、大国が小国に敗退することもあります。聖書には多くの実例があり(士師7章、イザヤ36-37章、等)、ベトナム戦争などの近代的な戦争においても似たようなことは起きました。

③～⑤はほぼ同じ事柄の言い換えです。

③知恵ある者（賢い人）のためにパンがあるのでもなく

賢く分別ある人であっても、その誠実な生き方とは裏腹、生活苦に見舞われることがある。生き方の知恵そのものが生計を保証してくれるのではない。

④聡明な者（識別力のある人）のために富があるのでもなく

物事をよく見極められる人であっても、金銭には恵まれないかもしれない。

⑤知者（知識ある者）のために恵み（好意）があるのでもない

物事についての知識が豊富であっても、人には好かれえないかもしれない。

以上のように、コヘレトはこの世界に満ちる不条理を様々な角度から説明しています。なぜあんなに正しい生き方をしている人が報われないのか！なぜあんなに悪いことをした人が裁判に勝利してしまうのか！なぜあれだけ実力のある人に結果が伴わないのか！そのように問われる世の中であります。

本論 2. チャンスがなければ

ここまで述べてきた不公平な現実について、コヘレトは一つの答えを与えていきます。それは、「**時と機会**」にかかっているのだと。冒頭で少し翻訳の問題にふれましたが、「偶然」と訳された言葉を「機会」または「チャンス」と訳し直してみると、ニュアンスはかなり前向きになります。物事には掴むべきチャンスがあって、良い結果を得られるかどうかはそのチャンスに恵まれるかどうかにかかっているのだ。能力そのものも大事ではあるが、もっと重要なのはチャンスを見極めることである。チャンスを見極められなければ、人はせっかくの能力を生かすことができないと。

しかし、このチャンスというものは厄介で、いつ自分に臨んでくるかが分からないと言われます。それは急にやって来て、気づいたらもういなくなっているかもしれない。あの時に掴んでおけば！と後悔したことは誰にでもあるのではないのでしょうか。

私が神学校の音楽科に在籍していた頃、オルガンの先生からある演奏会に誘われました。日曜日の午後に開催されるものだったので、間に合うかどうか微妙だったため迷っていたのですが、その時に言われた言葉に後押しされました。「チャンスには前髪しか付いていなくて、後ろ髪を掴もうとしてももう掴む場所はないのよ」。先生としては、

この機会を逃さないでほしいという思いで進言してくださったのだと思います。私はその演奏会に参加し、今でもその演奏者たちの立ち居振る舞いやダイナミックな演奏が脳裏に焼き付いています。CD では決して得ることのできないものを得ることができました。重要なのは、この時に学んだ教訓であります。

「チャンス」という事柄には消極面と積極面の両方があるでしょう。消極面というのは人間の側はそれがやって来るのを受動的に待ってはいなくてはならないということであり、積極面というのはチャンスは誰にでも与えられる可能性があるということです。たとえその時は逃してしまったとしても、また別のチャンスが巡ってくるかもしれない。重要なことは、チャンスに備えて生きているかどうかということであり、これを信仰の見地から言い直すならば、自分に与えられた賜物を磨き続けているかどうかということです。賜物を磨き、いつでも取り出す備えができていれば、チャンスがやって来た時にマッチし、掴み取れる可能性が高くなります。どうせ自分にはそんなチャンスは巡って来ないんだから…と諦めてしまっていては、賜物を磨く積極性も失ってしまうでしょう。「すべての人が時と機会に出会うからだ」というフレーズは、そのように理解できると思います。

本論 3. 災いが襲いかかる時

人は自分の時さえ知らない。不幸にも魚が網にかかり、鳥が罠にかかるように。突然襲いかかる災いの時に、人の子らもまた捕らえられる。(9:12)

「自分の時」というのは、これまで「チャンス」について語られていたのに対し、「死の時」「災いの時」など「喜ばしくない時」を言い表しているでしょう。不慮の事故、思いがけない病、災害、突然の死など、私たちが予想もしていない時に降りかかってくるものがある。これもまた、チャンスと同様、人間にはコントロールできず、来たら受けるほかありません。

私自身も幼少の頃に車に撥ねられたり、追突事故に遭ったりといった経験をしてきましたが、こういったことはまさに「思いがけない時」に起きてまいります。どんなに気をつけていても避けきれないものもあるのです。

12 節では「魚が網にかかる」「鳥が罠にかかる」と、二つの野生動物が例に挙げられていますが、それらは通常はすいすい泳ぎ、自由に飛び回っています。ところが、次の瞬間には彼らの命を奪う罠によって捕えられてしまうかもしれない。人生の無情さを語っております。

このような希望なき人生観をもって、コヘレトは何を教えようとしているのでしょうか

か。人間があくまでも無力な存在であることに開眼させようとしていることは確かです。しかし、彼のメッセージはそれで終わりではないでしょう。本書には明確に書かれていませんので、解釈の仕方によっては絶望的な結論に至ってしまいます。ところが、聖書はここで「神の恵み」というものを持ち出してまいります。つまり、人間が自分の無力さに気づき、自分の人生が神の御手の中にあることを認めたときに、神の恵みに頼って生きる道が大きく開かれていくのです。

従って、これは、人の意志や努力ではなく、神の憐れみによるのです。（ローマ 9:16）

「恵み」というものを改めて認識しておきたいと思いますが、これは神が人に一方的に与えるギフトであり、人は肩の力を抜いて受け取るばかりの相互関係にあります。神が罪人と結んでくださる「恵みの契約」は、人には何事もし得ないところで、神が一方的に守り続けてくださる契約です。今日の箇所では語られている「人間の無力さ」は、実はこのところにつながっているのです。

【結論】

コヘレトの言葉の特徴を忘れずにお読みいただきたいと思います。それは、この著者は明確な結論を言わず、読者に「もし神なしに生きたら」という行き場のない現実を示し、では何に頼ればよいかを考えさせようとしているということです。「偶然」という言葉が敢えて使われたところにも意味があるでしょう。この世で起きている出来事を「偶然」と捉えるか、それとも神の聖定の下で起きている事柄と捉えるかで、世界観・人生観・歴史観はあまりに大きく変わってきます。神を知る者は、自分の人生が神の御手の中にあるところに安らぎ、この方と契約を結び、その導きと、与えてくださる一つひとつの機会を大切に歩むことができるのです。

【祈り】

すべての人に賜物と機会を与えてくださる天の父なる神様。私たち人間は突然降りかかってくる出来事に対して無力な存在ではありますが、そのことを悲観せず、あなたの主権を認め、またいつ何時でも与えられるチャンスを掴めるように備えある生き方を続けていきたいと願います。今この身動きの取れない状況下にあっても、動き出せる日に向けてあらゆる面で「神のもの」を磨いておきたいと願います。心の帯を引き締め、あなたに用いられる備えをなさしめてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

この世で起こる一切の出来事を、ご自身の聖なる定めの下に導き給う、父なる神の愛、
無力な者と一方的な恵みの契約を結び、神に依り頼む人生を祝福し給う、主イエス・キ
リストの恵み、

主のご用に備え、磨かれた賜物と備えられた機会を、絶妙に結び合せ給う、聖霊の親し
き交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。